

提

言

三味線音楽の魅力と

稽古・けいこ・ケイコ

長唄演奏家 八代目家元 きねや 杵屋 やきち 彌吉、



1 まず興味を

私は、八代目杵屋彌吉の江戸長唄の由緒ある名跡を継ぎ、一層伝統芸能の魅力と大切さを伝えるため、ボランティア演奏会を開き、千葉県内の小・中学校、四万十音楽祭、日中友好会館、カリフォルニア州トーランス市などで三味線の実演を行ってきた。

学校での実演の場では、子供たちにはなじみが薄い三味線に興味をもってもらおうと、折りたたみ式の三味線を組み立てるところから見せ、「三味線は江戸時代からの日本の名楽器」であることを説明した。

ここで皆さんにも、三味線の歴史を紹介したい。三味線は、今から約3300年前頃のエジプトの壁画にある、胴に羊の皮、絃にラクダの腸線が使われている大きさ1m位のノフル（ネフェル）という楽器が始まりと言われている。そしてシルクロードを経て形を変えながら、室町時代末に中国から琉球経由で蛇皮線、三線が堺に伝来する。その後、琵琶法師中小路が、皮を蛇皮から猫や犬に変え、大きさもやや大きくし、撥（ばち）を使うなどの改良を加えた。

その後、三絃師（三味線業者）が、綿花輸出の際、船底にバランスを取るために積んできた紅木（こうき）に目を付け、堅く木目もきれいなので三味線の棹に利用するようになり、現在に至っている。

古くは、棹や天神には檜、紫檀、花梨等、ねじには、黒檀、象牙等を使用した。絃は絹糸を使い、上の糸から一の糸（三の糸を三本

撚り合わせた太さ）、二の糸（三の糸を二本撚り合わせた太さ）、三の糸となっている。また、ノフルはヨーロッパに渡り、バイオリン絃楽器等へと変化していった。（胴で共鳴、駒が無いと鳴らない事などは三味線と共通）

2 音を聴かせる

実演で三味線を鳴らし始めると、子供たちはあまりの音の大きさにまずびっくりする。大きな音が出る理由は、胴が太鼓と同じ構造をしており、絃楽器ではあるが打楽器的な要素もあり、糸と皮を叩いて弾くからである。また、長唄に登場するいろいろな鳥や動物の擬音を聴かせるなどして関心を持たせた。

次に、子供たちにも三味線を弾かせる。三味線に触れたことがある子供はめったにいない。太鼓をたたいたり、琴をはじいたりして音を出すのに比べると、三味線はなかなか難しい。撥を使って音が出た時の子供たちの顔は、とてもうれしそうである。

そして、いよいよ本格的な長唄三味線の演奏を行う。「勧進帳」「花見踊」「越後獅子」等を演奏し、三味線の撥さばきと音色、独特の節回しを味わわせる。子供たちからは、「三味線を近くで見たり聴いたりしたことがなかったので楽しかった」「家元の三味線は外国の楽器に負けない美しい音で心が和む気がした」

「三味線は日本の文化を象徴する楽器だと思った」などのうれしい言葉をもらった。皆、出会う機会が少ないだけで、見たり、聴いたり、演奏したりなど、体験することで三味線

音楽の良さや素晴らしさを感じることができると思った。今後子供たちが大人になり、世界にはばたいて行く時に、三味線の演奏を聴いたことがあると胸を張って話せるようになってほしいと願っている。

3 稽古・けいこ・ケイコ

長唄の稽古は師匠と1対1で、真向いに見台（唄本を置く書見台）をはさみ、師匠の全てを真似する事から始める。私が中学3年の頃は週6日間、1回のけいこは30分くらいだった。学校帰りに師匠の家に伺うと、多勢のお弟子さん達が順番待ちで話に花を咲かせていた。また、あとから来た近所の方が「坊や先にやらせてね」の一言で、私が稽古をつけていただけるのは午後8時過ぎになることもあった。毎日人のけいこを聞いているだけだったが、初めて師匠からお習いする曲も、耳から入っていたためほとんど最後まで弾く事ができた。今思い出すと、あの時の私に対する師匠のけいこの仕方が「門前の小僧習わぬ経を読む」のとおり無言の教えだったのだろう。

東京芸術大学に入学後、ピアノ科の学生に聞いた話が耳に残っている。それは1日練習をしないと自分にわかり、2日しないと先生に見破られ、3日しないと聴衆に分かるという話だった。私もその話を聞き、毎日8時間くらいは練習したものである。そのときの練習の蓄積（利息）で、今も若い人とあまり差がなく弾けるのかなと思っている。60歳の時はそう思っていたが、今は80歳近くなり手が回らなく蓄積（利息）も無くなり、枯れた芸（ムード演奏）になってきた。

いつの間にか教える立場になって、今までに東京芸術大学に6人を合格させ、演奏家（専門家）を4人育てた。経験上知ったことは、

初めに叱ると弟子はオドオドし、何を言ってもだめである。だから初めはよくできたとはめる。その上で、あそこここはこう直したほうが良いと、少し強い口調で言うと弟子はよく理解し、すぐに上達する。

以前、童門冬二氏の「鬼作左」という本を読んだ時に、私が常日頃思っていたことが書かれており、私の教え方は間違っていなかったことを改めて認識した。その話とは、家来に対し、「叱れ、怒るな」ということである。怒るのは自分の感情を相手にぶつけるだけで、叱るのは相手の気持ちになって少しでもよくしようと思ってやることだそうである。私もいつもこの気持ちを忘れずに稽古を続けている。弟子を育てるということは並大抵ではできない。

私は、表題の中の「ケイコ」はカルチャー教室の団体ケイコではないかと思っている。

「けいこ」は「おけいこ事」といわれるように教養の一つで、注意を受けるが叱られることはない。「稽古」は寒稽古等と同じように学び習うことで、血のにじむような激しさと努力が必要であり、遊び事では済まされない。ただ怒るのだけとは違って、叱るのはお手本を見せ説明しなければならない。

今現在、長唄のケイコ事に関しては時代の変化とともに、その場で聞いて、見て、真似て覚える時代から、録音や録画、教則本等を活用して、短期間で学ぶことができるようになった。しかし、いろいろと便利になったが、今でも孔子の教えが通じるように、人が人を教える（稽古）事は時代が変わっても根底はあまり変わらず、いつの時代も同じではないかと思っている。

これまで私が人を教え育てる中で経験してきたこれらのことが、教育に携わる皆さんのお役に立てば幸いである。